



見 見 天

え え 野
祐

る る 吉

見える見える



天野祐吉

見える見える

1994年10月12日 初版第1刷発行

著 者 天野祐吉

発 行 者 森本政彦

発 行 所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3 郵便番号111 振替00160-8-4123

印刷・製本 中央精版

©1994 YUKICHI AMANO

ISBN 4-480-81357-8 C0095 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが下記に御送付下さい。

送料小社負担にてお取替致します。

ご注文・お問い合わせも下記へお願いします。

〒331 大宮市櫛引町 2-604 筑摩書房サービスセンター

TEL. 048-651-0053

見える見える*目次

一章 遊びのある風景

11

雑感……………12

ながーい一日……………16

地球テレビ……………18

異界チャンネル……………20

シ語辞典……………24

生きざま……………24

前向き……………25

活性化……………26

ホンモノ……………27

がんばる……………29

感性……………30

ケジメ……………31

二章 ふつうの風景

33

「ふつうの人」になりたい	34
ふつうじゃない	36
笑いはこころのコリをほぐす	38
どっかおかしい	41
花がない	44
マスコミという名の空気発生器	47
電文の向こう側	50
歓迎・水飢饉	52
犬さん、猫さん、ご苦労さん	55
「俳句音楽」が聞きたいね	59
退屈とのつきあい	62
スイマセン	65
ニセモノが好き	69
自然はこわい	73
考えるツボ	75
一円玉の逆襲	78

黒時計の反乱……………

82

低血圧の時代……………

85

三章 作品のある風景

87

批評の神髄——野田秀樹『この人をほめよ』……………

88

いわゆる画家じゃない——横尾忠則『いわゆる画家宣言』……………

92

谷内さんがくれた玉手箱——『谷内六郎画集』……………

96

猫二人——荒木経惟『愛しのチロ』と吉田ルイ子『わたしはネコロジスト』……………

99

言葉のサーカス団——『ちくま哲学の森』定義集……………

104

易しさの優しさ——J・W・ヤング『アイデアのつくり方』……………

107

ことばは聞くもの——谷川俊太郎『ことばあそびうた』……………

110

貧乏性のカブリッチョ——砂川しげひさ『ぼくの漫画人生はカブリッチョ』……………

112

伝記は面白い——ラルフ・W・モス『朝からキャビアを』……………

114

「解説」は要らない——天野祐吉『もっとマジメにやれ』……………

116

「日本語」を演じつづける——『写真集 山本安英の仕事』……………

118

美意識の人——花森安治と『暮しの手帖』……………

121

戦時下の道楽雑誌——『フロント』……………124

ソッポを向く人——『ちくま日本文学全集』正岡子規……………128

メディアの暴力、てか——文学座公演『ふるあめりかに袖はぬらさじ』……………134

フェリーニさんはすごい——『8½』と『ボイス・オブ・ムーン』……………138

壮大な退屈——ファミコン『三国志』……………141

見かけも中身のうち——林光の『ドン・ジョバンニ』……………144

十八世紀の宇宙飛行士——モーツァルト『ピアノ協奏曲イ長調』ほか……………146

ぼくはモーツァルトさんに会った——モーツァルト『魔笛』……………149

チチンブイブイ氏の『魔笛』案内……………152

四章 自分のいる風景 163

私は芋ようかんだ……………164

ガラちゃんが行ってしまった……………167

グリコの宇宙……………170

千葉の匂い……………172

聞き上手……………174

お芋のときめき.....177

ウォーターフロントだってよ.....180

松山囃.....183

明教館の子規さん.....183

うどん文化ぞな.....185

よもだの国から.....187

竹輪の友.....189

川が見ている.....191

あのころ、学校は面白かった.....193

ムダはいらんかな.....195

贈り物の味.....198

空海サンと一遍サン.....200

グルメ嫌い.....203

行楽嫌い.....205

健康嫌い.....207

ぼくの大西洋.....209

藤色は貴族の色……………212

敵はどこだ……………216

シミユの友……………219

窓のサイズについて……………221

五章 広告のある風景

225

平賀源内の嗽石香……………226

近ごろ広告入門……………228

広告は遊びである——あるいは大貫卓也の仕事について……………234

ひらけ、ゴマ！……………238

広告という名の福音……………242

冗談地下鉄……………246

広告のなかの銀座……………250

広告の中のクルマ……………256

本の広告の話……………262

湾岸戦争が広告したもの……………268

エイズと言えばコンドーム？ 270

言葉が息をとめるとき 274

想像力の戦争 278

装 幀 天野祐吉

カバー写真 天野映子

本文挿画 三原千佳

見える見える

一章

遊びのある風景

雑感

ぼくは雑な人間である。

講演をしようと思っても、すぐ雑談になってしまう。

本の読み方も、完全に雑読である。

で、本を読んでいるときも、いつも雑念にとらわれている。

なんで食っているのかと言え、雑収入である。

本当は歌手になりたかったのだが、お前の歌は雑音だと言われてあきらめた。

本業の編集者だけでは食えないので、雑文を書いている。

が、それも雑用に追われて、締め切りを守れたことがない。

編集者としては「ちくま哲学の森」みたいな本を作りたいのに、作っているのは「広告批評」という雑誌である。

その雑誌がまた、森毅と所ジョージが雑居するような雑品である。

つきあう人たちも雑多なら、飼っている猫も雑種である。

旅に出ても、美しい自然が苦手で、都会の雑踏のなかにすぐ戻りたくなってしまう。

そうそう、そう言えば中学の入学祝いに親戚からもらった高級ノートの上に「雑記帳」と書いて、父親から「もったいない使い方をするな」と怒られたことがある。

思えばあのころから、「お前のやり方は雑でいけない」と、なにかにつけて怒られていたから、ぼくはよほど雑に生まれついていたんだろう。

その父親ももう死んでしまったが、生前はよく「雑草のように生きよ」なんて、カッコいいことを言っていたつけ。

それでもぼくは親孝行だから、父のオシエをそれなりに守り、雑草のようにには生きられなか

ったけれど、雑菌のように生きてきたつもりでいる。

で、情報の雑貨屋として、なんとかかんとか食えるようにはなったのだから、おやじさん、カンベンな。

もつとも世の中にはキビシイ目を持った人もいて、ぼくのようなヤツは「マスコミの雑兵」だとののしられることがある。

たしかにそれはその通りだし、内心ぼくも自分の雑駁さにウシロめたさを感じてはいたのだが、そういう批判もまた雑駁であると、ぼくは一九八五年に気がついた。

その年、総務庁統計局の「家計調査年表」によると、勤労者世帯の一月平均消費支出のうち、なんと「雑費」がほぼ五〇パーセントに達したのである。

ついでに言ってしまうと、その勤労者も半数以上が第三次産業の従事者であり、そのなかでも「サービス業など」というジャンルで働いている人が圧倒的に多いのだが、

「サービス業な